

郷土資料館だより

V o 1 . 2 0 . N o 2

1 9 9 8 . 2 . 1 0



伝統行事を訪ねて

安久の「お神楽」

安久は三島市最南端の集落です。^{大場}狩野川のほとりに立地していて、古くから水田農耕集落として開けました。狩野川の南は函南町ですが、川を隔てての交流が昔から行われていたそうです。

かつての安久は北村、上村、辻村、川崎村、多呂村、西村というように六ヶ所の小集落に分かれていましたが、現在ではそうした集落の呼称も若い人の間では使用されなくなり、忘れ去られようとしていました。

また、安久の正月行事である「お神楽」は昔からムラの若い衆によって行われてきましたが、戦後一時期中断され、伝統行事の存続の危機の時がありました。これを復活して、昔のようににぎやかな正月を取り戻そうと立ちあがったのが、有志による「保存会」の人々でした。10数年前の頃のことだといいます。それ以来、毎年正月2日には保存会の人々による昔ながら

の「お神楽」がムラを回り、家々に新年のお祝いを届け続けています。

「お神楽」がムラを回っていただいた祝儀は、昔の地名を残すための「道標」造りにも当てられています。

正月2日、「お神楽」の保存会は王子神社境内に集合して、出発式を行い、まず拝殿で舞い初めを奉納します。2頭の獅子頭は保存会の会員が交代でかぶります。1頭は昔から伝えられてきた頭を修理したもの、もう1頭は祝儀を貯めて作ったものだそうです。拝殿での奉納が終わるとお神楽はムラに出かけて行きます。

ムラに出た2頭の獅子頭は昼をはさんで午後まで各家々を巡回し、最終は神社境内にある公民館。ここでは「お神楽」終了のナオライが開かれました。

三嶋大社の 「お田打ち」



「福の種」、「まき餅」にむらがる善男善女

三島の正月は三ツ石神社境内前にある「時の鐘」の除夜祭で明けます。除夜の鐘が鳴り終わる頃になると大社前の道は、初詣の人の賑わいで埋め尽くされます。正月三が日の間、初詣の人は静岡県一だと言われています。

そして、七日、一般の家庭では「七草粥」が行われます。「春の七草」を摘んで、お粥に入れて食べ無病息災を祈ります。

同じ日、三嶋大社の舞殿では「お田打ち」が奉納されます。演じるのは奉仕者と呼ばれている三嶋大社旧社家の人々です。

「お田打ち」は中世以来伝えられてきた田楽で、翁の穂長と婿殿の福太郎という主役の二人が、春先に田を起こし、肥料を施し、代掻きを行い、種をまき、鳥を追うなどの稲作過程の所作をして、稲の無事な生育を祈願するという予祝行事です。

この日、大社舞殿周辺には田方や駿東などからたくさんの善男善女が集まり、「お田打ち」を見学し、終了後に舞殿上から撤かれる「餅」や「福種」と称される粃種などを手に入れようと待ちかまえています。かつての「お田打ち」は、農民たちの種粃情報の交換の場だったと伝えられますが、その名残が今も見られる光景です。

(静岡県無形民俗文化財)

伊豆佐野・ナカモヨリの山の神講 「ヤッサモチ」

伊豆佐野は三島市北端の集落です。隣の裾野市とは箱根西麓を源流とする大場川で境を接しています。この川の名称は現在でこそ大場川ですが、昔は文字通り伊豆と駿河を分ける意味での「境川」でした。集落は境川の太古の流れが箱根西麓に自然造成した谷間に開けています。

伊豆佐野は周辺の他村に比較して大きな集落で、谷間の奥の方からカミ(上)、ナカ(中)、シモ(下)という小集落のモヨリ(最寄り)という単位で分割されています。モヨリそれぞれには山の神やサイノカミが独自に祀られており、祭礼や年中行事が行われてきました。またモヨリにはさらに組と呼ばれる最小単位の組織があり、いろいろな行事が組を中心にして行われています。

「ヤッサモチ」は伊豆佐野のナカモヨリの行事として昔から行われてきた山の神講の餅つき行事です。山の神の祭礼のホンビは正月17日ですが、餅つきは前夜の16日から始めて深夜12時過ぎにつき終わり、山の神に供えます。餅をつく際「やっさ、やっさ」という威勢の良いかけ声をかけることや、深夜に山の神に供えに行く道々「やっさのさあ」と大声を掛け合いながら村内を歩くなどという特徴ある行事で知られています。

ナカモヨリの山の神講は旧戸を中心とした約40戸で構成されています。山の神講の当番となる家はヤドと呼ばれ、ヤッサモチの餅つき会場となったり、その際、組の人々をオフルマイでもてなすことなどが役割とされています。ヤドとなる家は1軒ですが、行事の催しは組単位で行います。ナカモヨリは藍の澤組、田中組、中村組の3組に分かれています。

「ヤッチモチ」次第と見どころ

と き 平成10年1月16日から17日

ヤ ド 鈴木英之宅(藍の澤組)

- 餅つき** 午後8時から当番組以外の他組の人たちによる餅つきが行われる。午後11時頃からは当番組の人たちによる餅つき。
- 臼と杵** 臼はヤドが提供するケヤキの臼。杵はヒメシャラの木で作った樺の縦杵、約20本で、共有。
- 特徴** かなりの暴れ餅つきで、10人くらいのつき手が臼の周囲をぐるぐる回りながらつき、一斉に発するかけ声で餅を中空に突き上げたりする。その際、泥や煤などが入り混じったりするので黒く煤けた餅になったりするが、勢いの良いことだとして許される。昔はクサヤネ（茅葺き屋根）の軒下などにわざと擦り付けたりもしたという。勢い余って臼が横倒しになって転がったりもする。
- お供え餅** 餅米は組で持ち寄り、2升5合の餅を作る。つき上がった餅は、ヤドの玄関先でヒメシャラの杵から取り集められ組うちで分配され

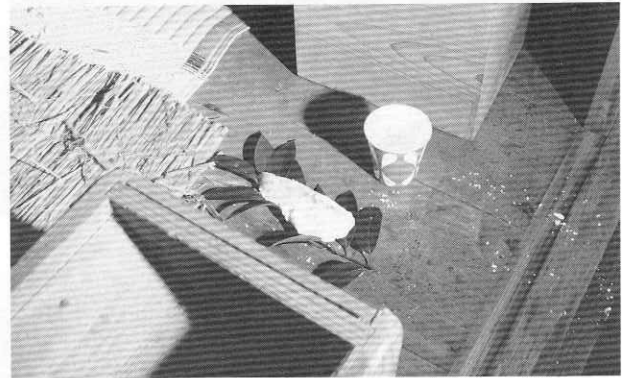
る。餅とお供えを作るのはすべて男衆の手により、女性は口出しをしない。

- お供え** 当番組がついた餅は、すぐ丸められて山の神までお供えに行く。山の神の前では草刈り鎌で餅を切り、切った方の餅を木の葉の上に載せて供えてくる。その後拝礼していったん宿に帰る。
- 村を回る** 当番組の男衆は山の神への拝礼とお供えがすんだ後に、揃って村内を「やっさのさあ」と大声を掛け合いながら回る。

- オフルマイ** ヤドの座敷と広間では、1回目と2回目の餅つきの間にはヤドで用意されたご馳走や酒でオフルマイが開かれる。昔は、村内を回った後にも、朝まで延々と開かれていたものだが、今では行われなくなった。



ヒメシャラの杵での餅つき



山の神への参拝と供え餅



つきあがった餅を杵からとるヤド男衆



かけ声も高らかにムラを練り歩く

「北上村」 — 箱根山麓の農村 —

郷土資料館では、企画展「きたうえ村」(平成10年3月21日～5月10日)を開催するため、調査中です。

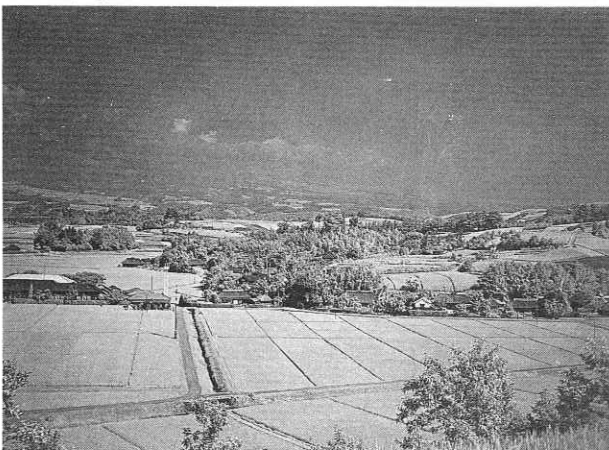
北上村(現在の北上地域)は三島の北部に位置し、東海道三島宿から御殿場・山梨方面に抜ける佐野街道(甲州街道)に沿う5つの集落(佐野、徳倉、幸原、壱町田、沢地)からなる村でした。箱根山裾に広がる静かな農村地帯で、路傍に道祖神がただずみ、龍澤寺(臨済宗)からは名僧が輩出し、伊豆長八のこて絵が残るなど、民俗と、文化の香り濃い地域です。しかし昭和40年代より、住宅地として開発され、急激に変貌をとげています。今回の企画展では、昭和10年3月に三島町と合併した北上村の歴史・民俗・文化を取り上げ紹介します。

収集した資料の中には、貴重な農村の写真が残されており、年代の変化を伺うことができます。

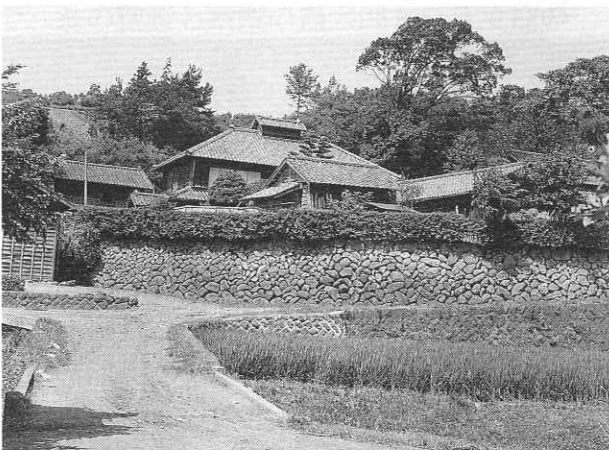
北上村の1つの転機は、大正8年に三島町との境に、野戦重砲兵連隊が移転してきたことでした。田や畑が買い上げられ兵舎や練兵場となり、道路・橋も整備されます。軍へ箱根山麓で刈った稈を納める農民達。兵舎の糞尿を肥料としてもらい受ける集落もありました。何よりも、日常的に訓練に向かう兵隊や軍馬・砲車に出会う機会が多くなっています。

北上村の精神的支柱は見目神社、八乙女神社、耳石神社、駒形神社などの神社で、かつては神社の祭典が、地域の人々の最大の楽しみでした。ことに毎年4月に末広山でくり広げられた馬頭観音講とその草競馬では、満開の桜の下、春の訪れの喜びを北上村の人達が分かち合ったものです。

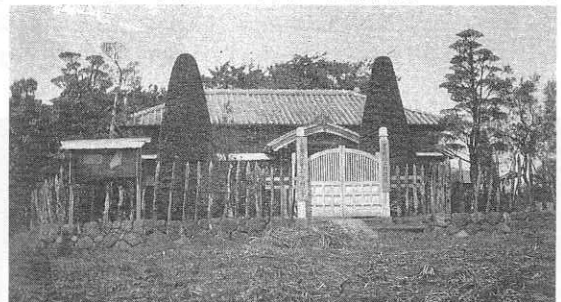
当時に比べ人口は爆発的に増加しましたが、祭りもかつての賑やかさを失い、地域の特質を模索している今、素朴な農民がほとんどであった「北上村」の時代を再確認してみます。



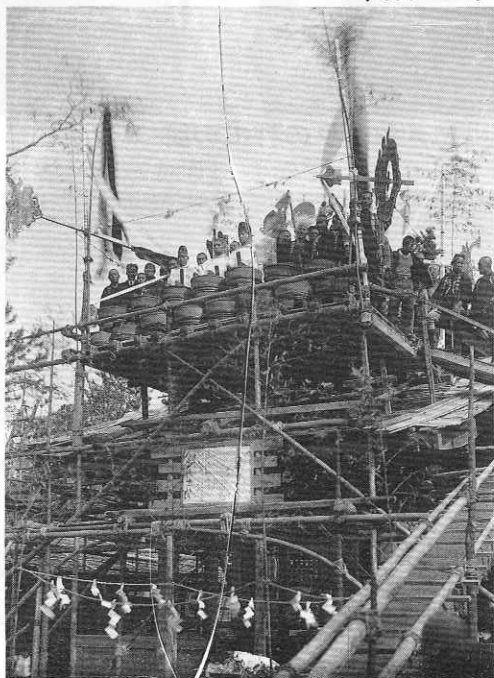
▲徳倉高台山より北を臨む
左に徳倉小がみえる。(昭和10年頃)



▲上沢地の農村風景



▲北上村役場、青木橋の東側高台にあった
(昭和10年頃)



▲八乙女神社 上棟祭 (昭和15年頃)

企画展

「目いっぱい 腹いっぱい 東海道」を終わって

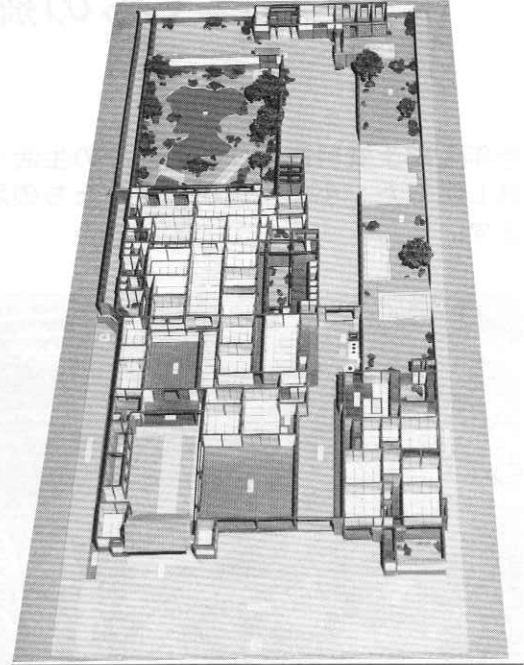
展示期間 平成9年9月14日～11月9日

展示点数 160点

入館者数 18,091人

今回の企画展は沼津市歴史民俗資料館・富士市立博物館と合同企画したもので、江戸時代の旅及び三島宿・沼津宿・原宿・吉原宿を紹介しました。各博物館から資料を持ち寄って構成しましたが、成立が異なる各宿場の特徴を比較することができ、来館者には好評でした。

この展示のために、各館がそれぞれ三島・沼津・吉原宿の本陣の復元模型（100/1尺度）を作製し、規模の比較をしてみました。当館は残された絵図をもとに三島宿樋口本陣の復元模型を作製しました。部屋数の多さ、上段の間の造りなど最盛期の本陣の様子を伺う事ができます。さらに樋口本陣の文書を基に、本陣で出された献立を復元し、そのサンプルを展示しました。「こおりこんにゃく」「石焼きとうふ」など今では珍しい献立が供されていました。



▲樋口本陣復元模型（100/1縮尺）



◀樋口本陣の献立



▲沼津宿の展示



▲吉原宿の展示

作った！歩いた！食べた！

ぼくらの郷土体験（郷土教室）

今年も郷土資料館では昔の人々の生活や遊びを体験する講座「郷土教室」を5回にわたって実施しました。小学生達が、自分たちの足で歩き、目でみて、ふれたさまざまな体験をご紹介します。



第1回「三島の歴史にふれてみよう」6/14 (講師 辻 真澄 氏 参加者19人)

こども達をつれて、一日かけて三島の宿をまわってみました。ふだん家族連れでは、行かないような名所・旧跡を訪ねました。

向山古墳群を皮切りに、玉澤妙法華寺、石畳を経て、笹原一里塚からこわめし坂を下ってきました。

テレビや写真でしかみたことがない一里塚を実際に見たり、石畳に使われた石が思いのほか深く埋め込まれていたり、こども達には意外な発見だったのではないのでしょうか。

ハイキング気分楽しんでだこども達でしたが、この日に見たり、聞いたりした体験を、いつか、もう一度思い出して今度は自分で訪ねてくれたらと思います。

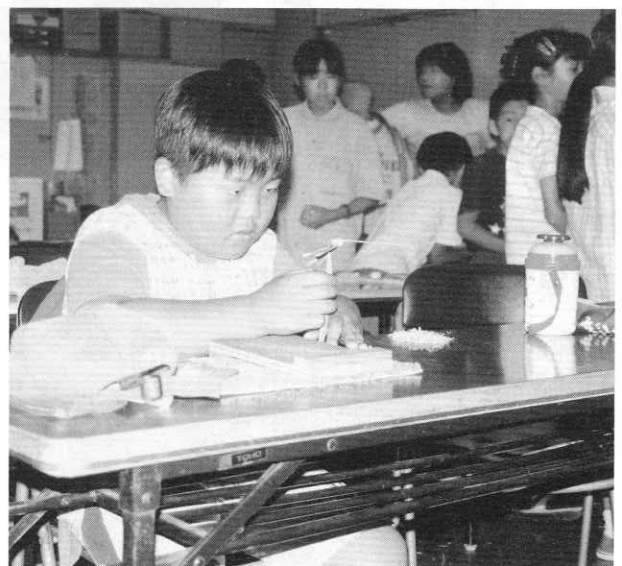
第2回「竹細工作り」7/12 (講師 瀬川 到 氏 参加者20人)

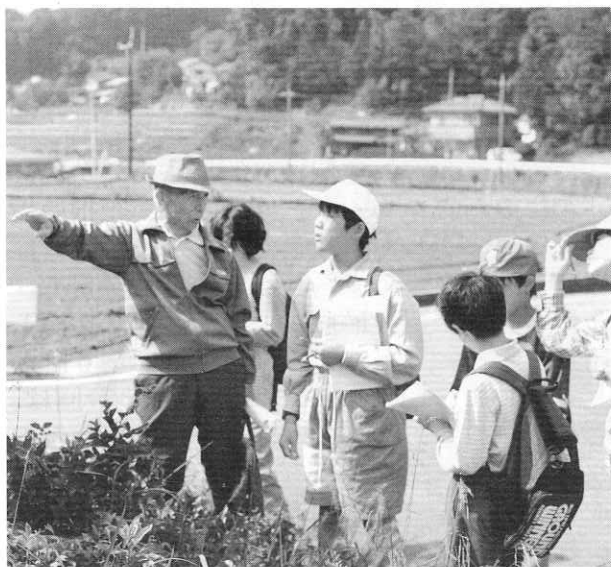
講師の指導で、午前中は、「竹とんぼ」、午後からは「ゆらりとんぼ」を作りました。当日はあいにくの雨にもかかわらず、男の子達を中心に、自分の作った竹とんぼを楽しそうに飛ばす姿が印象的でした。

「ゆらりとんぼ」は文字どおりとんぼの姿をしたバランスをたもつ竹細工です。

左右の羽根の削りだしなどは、竹の方向や向きを間違えたり悪戦苦闘していました。最後に講師にバランスなどを調整してもらって完成です。

女の子達は、完成した「ゆらりとんぼ」を持ち寄って、誰のが一番長く落ちずに残るか競って楽しんでいました。





第3回「北上村の歴史に触れてみよう」10/11
(講師 津高 重作 氏 参加者5人)

この回は、企画展「きたうえ村」(10年3月より開催)にあわせて企画しました。三嶋大社を起点に龍澤寺、歓喜寺などをまわりました。コースの途中に点在する史跡や神社、寺院を訪ね、そこにまつわる言い伝えなどを講師に教えていただきながら進みました。

ふだん、何気なく通りすぎている街並みや道端にも、わたしたちの「郷土」や「歴史」はひっそりとたたずんでいました。

第4回「古代の生活を体験」11/8
(講師 池谷 初恵 氏 参加者24人)

恐龍や古代の生活に興味あるこどもが集まりました。そのため、講師の質問に元気に何度も手をあげるこどもが数多く、見受けられました。

野外での火起こしでは、女の子のグループが一番乗りでした。せっかちな男の子より慎重な女の子のほうが火起こしには向いているようです。土器を使って作った食べ物は、とても質素なのに、こども達みんながおいしく味わいました。



第5回「正月用リースを作ろう」12/13
(講師 大場 由香 氏 参加者20名)

今回の「郷土教室」ではじめて親子参加の講座でした。

もともとクリスマスの飾りに使うリースを正月飾りとしてアレンジしようという企画でした。はじめに館長から伝統的な「お飾り」の意味についてお話がありました。

材料はアケビのつる、稲穂、ウラジロなどさまざまな自然の植物が、用意されました。その中でも水引は面白い材料でした。金銀・紅白に彩られた水引きを惜しげもなくリースに使うと、そこに見慣れた「正月の風景」がみえてくるふしぎな錯覚を感じました。

日本の伝統のふしぎさと奥の深さを感じた楽しい講座でした。



縄文土器づくり教室報告

完成！ぼくのわたしの 縄文土器



夏休み恒例の「縄文土器作り」が小学校4～6年生32名をむかえて今年も3回にわたって開催されました。

7月23日「土練り」

縄文土器の成分に近づけるため、粘土（テラコッタ）に砂・赤土・水を加えて、約2時間練ります。

強い日差しの中、子供達の額から、うっすらと汗が出てきます。

7月25日「成型」

前回練ったねどを使って土器の形を作ります。丸い底の上に輪積み法で粘土を積み上げます。

最後に、縄やへらなどで、装飾を加えて、よく乾燥させます。

8月21日「焼成」

ブロックで囲んだ炉の中にマキを大量に燃やしてカラ炊きをし、オキを作ります。オキの上に土器を置き、約1時間野焼きをします。火がすっかり落ちた後、土器を取り出すと自分だけの土器の完成です。宝物のように大事に持ち帰りました。

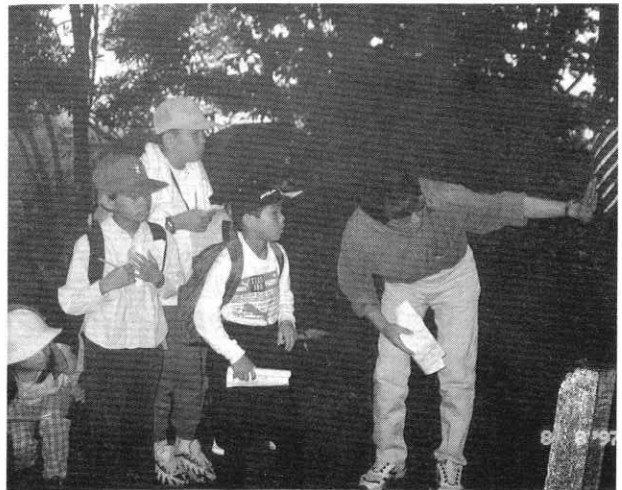


昔の旅はどんな旅

企画展体験講座「箱根の石畳を歩く」8/8
(講師 館職員 参加者5名)

今年の夏の野外学習は、例年と趣をかえ、「箱根の石畳を歩く」と銘打って、箱根西坂を子供達と訪ねてみました。

当日は真夏にはめずらしく涼しげな一日で、石畳の散策には、最適な天候でした。接待茶屋跡を起点に三ツ谷新田松雲寺まで約6km余りを、すべて歩いて下って来ました。今回は、春の郷土教室のときには、歩かなかった昔のままの石畳を踏みしめることができました。途中いくつかの史跡では、館職員による説明に耳を傾けながら、テキストに熱心に書き込んでいました。最後まで自分の足で歩き通したことから、子供達にとって、昔の旅人の大変さを知ることでできた貴重な体験となりました。



利用案内

休館日 毎週月曜（祝日の場合は翌日）
12月27日～1月2日

開館時間 午前9時～午後4時30分

入館無料（但し、楽寿園入場の際、有料）

三島駅（南口）から徒歩5分。市立公園楽寿園内

郷土資料館だより No.59

平成10年2月10日発行

（年3回発行）

編集 三島市郷土資料館

住所 〒411-0036

三島市一番町19-3 楽寿園内

TEL 0559-71-8228

FAX 0559-81-3730

発行 三島市教育委員会